

日本社会心理学会会報

225 号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:藤島喜嗣)

2021 年 1 月 7 日

大淵憲一先生・安藤清志先生・外山みどり先生が名誉会員に推戴

日本社会心理学会 2020 年度総会にて、大淵憲一先生、安藤清志先生、外山みどり先生が名誉会員に推戴されました。日本社会心理学会に対するこれまでの多大なる貢献に心より感謝申し上げます。この度の推戴に対し、各先生よりコメントを頂戴しております。以下に掲載いたします。

お礼に代えて

大淵憲一

この度は、名誉会員にご推戴いただき、誠にありがとうございました。社会心理学会の名誉会員には錚々たる先生方が名を連ねていらっしゃいます。これに加えていただけることは、大変光栄なことだと感じております。

コロナ禍の中、教育活動はどこの大学でもリモート講義が中心になってきているようです。「慣れると、リモートの方が楽だから」と、事態が収束してもこれを続けようと思っているとおっしゃる先生方も少なくないと聞きます。私が勤務する放送大学宮城学習センターというところは、通信制大学の学生のため、スクーリングを実施することがひとつの大きな役割です。このため、感染リスクがある中ではありますが、10 月から対面授業を再開しました(もちろん、感染症対策を施してですが)。講師の方々もやりにくいのではないかと心配していたのですが、ところが意外にも、講義を終えた先生方の多くが、むしろうれしそうに笑顔で「いや～、実に楽しかった」と言ってくれます。「久しぶりだが、やっぱり対面はいいね」と言ってくださいます。これに共感される会員の方々も多いのではないのでしょうか。こうした感想をうかがって、対面授業は、学生たちだけではなく、実は教師にとっても重要な意味があったんだと思うようになりました。



コロナ禍以前、普通に講義が行われていたときには、教室の中で、学生たちの「そうだったのか」という驚きの表情、納得したという動作、怪訝な様子、その姿勢などから、彼らの集中力や関心の高低などを講師は敏感に察知し、そうした信号を受け止めながら講義内容を自己評価し、その結果に基づいて、満足したり反省してきたのでしょう。学生たちの反応は、教師にとって講義をする動機付けであり、強化因子でもあったのだし、自分の思考やロジックを見直す重要な手がかりだったんだということに改めて気づかされました。それらはリモートではどうしても弱くなります。

学会での研究交流はもちろん大切ですが、大学での学生たちとの日々の触れ合いと交流は、教員が教育活動、研究活動を進展させる上で手掛かりとなるものを豊富に含んだ土壌であったこと、それは自分にとってもそうだったんだろうと思いながら、自分の長い教師生活を思い返しています。

社会心理学会には入会以来 40 数年が経ちました。この間、私自身だけでなく、私の学生たちもまた当学会を主要な研究発表の場として利用させていただきましたが、その経験を通して多くの重要なことを学ばせていただきました。この機会に、感謝を申し上げたいと思います。

(おおぶち けんいち・放送大学)

40 年を振り返って

安藤清志

この度は名誉会員に推戴いただき誠にありがとうございました。本学会に入会したのは大学院博士課程に在学していたときだったと記憶しています。その年の大会で、修士論文の内容を発表しました。当時はポスター発表がありませんでしたので、口頭発表での「デビュー」前、会場の外でドキドキしながら発表の練習をしたのを懐かしく思い出します。ただ、実験社会心理学に関心があったので、当時の私にとってはどちらかというとグループ・ダイナミクス学会のほうがメインの学会でした。元気な「グルダイ」の年次大会に毎年参加して多くの研究者と意見を交わし、当時盛況だった対人行動学研究会の活動にも加わりました。ここで得た有意義な交流の機会のお陰で、研究者としての基礎を固めることができたように思います。その後、社会心理学会での活動が多くなりましたが、これは 1989 年に本学会の第 30 回大会が、当時勤めていた東京女子大学で開催さ

れたことがきっかけでした。広瀬弘忠準備委員長の指揮の下、事務局長として大会運営にあたりました。その後、次第に理事や常任理事として社会心理学会の活動に携わることが多くなりました。この頃、6 年間にわたり理事長を務められた木下富雄先生は、停滞していた学会活動を盛り上げるべくさまざまなアイデアを実行に移し、その甲斐あって会員数は次第に増え年次大会も盛況になっていきました。この「発展期」の活気ある雰囲気の中で本学会の仕事ができたことは、私自身学ぶことがとても多く、社会に向ける眼が変わってきたと自覚することも多々ありました。若い頃、自分が会長になるとは夢にも思っていませんでしたが、2009 年から 4 年間、経験豊かな常任理事の先生方に支えられて何とか会長職を務めることができました。その間、東日本大震災が発生しましたが、学会としての対応などいろいろ考える機会を得ると同時に、若い世代の研究者たちの力強さに触れることもできました。また、個人的にも「社会」心理学者としての責任を遅まきながら感じるようになりました。振り返ってみると、このような形で社会心理学会の運営に関わりながら研究生活を送れたことは、忙しさは多少増したものの、自分にとって大変意義のある経験でした。

今、コロナ禍の真っただ中にあり、ふだんの研究・教育に加えて学会運営においてもしばらくは難しい対応が続くでしょう。社会の大きな変動に対して学会どうしの関係も変わってくるのが予想されます。その中で、「社会に貢献する社会心理学」の役割はますます大きくなっていくものと思われれます。本学会が難局を乗り越えてさらに発展することを祈念しています。



(あんど きよし・東洋大学)

名誉会員推戴を受けて

このたび日本社会心理学会の名誉会員に推戴していただき、大変光栄に思う一方で、自分が「名誉」という名称に値するであろうかという戸惑いも感じております。

私が社会心理学会に入会したのはたぶん 1987 年の春頃で、既に就職して何年かが経過しておりました。その 10 年くらい前、まだ貧乏な大学院生だった頃に、社会心理学会とグループ・ダイナミックス学会のどちらかに入ろうと書類を見た結果、年会費が少し安かったグループ・ダイナミックス学会の方に入会することにして、社会心理学会への入会は見送ってしまったのでした(!)。当時の社会心理学会は、学際的な傾向が現在より強かったように思います。「社会心理学研究」はまだなく(1985 年創刊)、1 年に 1 冊、「年報社会心理学」が刊行されていました。この雑誌は一般に向けて市販もされており、毎号、興味深い特集が組まれていました。私もそれを読んだりしておりましたが、学会そのものには入会しないままに時が過ぎてしまいました。

ということで、年齢の割に会員歴が短いのですが、1989 年に東京女子大学で開かれた第 30 回大会では、当時非常勤講師をしていたという縁で準備委員に加えて頂き、おそろいのピンクのポロシャツを着てお手伝いしたことを思い出します。当時から社会心理学会には多くの大学院生が参加し、懇親会出席者にも若手が多いため、テーブルの上の料理がなくなるスピードが他学会より速いという話を耳にしました。

ちなみに今年度第 61 回大会は、学習院大学が開催の準備を担当致しました。当初は通常開催の予定でしたが、予期せぬ新型コロナウイルスの感染拡大で WEB 開催に変更せざるを得ず、物理的に会員が集まることのない初めてのバーチャル学会となりました。私自身、ほぼ毎年、自分自身の研究発表をしてきましたので、学会場の賑わいがないのは何ともさびしく感じましたが、WEB 上ではあっても多くの意欲的な研究が発表され、掲示板での議論も盛り上がったという話を聞いて、準備委員会としては安堵しております。

学会での役職に関しては、編集委員に何度か加わった程度で、年数の割に実績はあまりありませんが、常任理事を務めた 2 年間には、渉外担当として大学院生の海外学会発表支援などを担当しました。ちょうど各大学でも似たような制度が整い始めた時期で、支援額の調整に苦労した記憶があります。

研究面では、大学院時代に帰属過程をテーマに選んで以来、原因の推論や他者認知、自己認知を中心に社会的認知に関する地味な研究を続けてまいりました。個人レベルの問題にとどまり、社会的規模の視野が欠けているかのように見られがちな領域ですが、現実の社会生活においては、各人がどのように自己や他者を把握し、身の回りに起こる諸事象を解釈するかが重要な役割を果たすものと思っています。

先日、名誉会員の名簿を見ましたら、立派な先生方のお名前ばかりで気が重くなりましたが、女性のお名前がないことに気づきました。ひょっとすると女性では初めてかと思うとますます気が滅入りますが、現会長をはじめ、今後は次々と女性の名誉会員が増えることでしょうか、それを期待したいと思います。最後に皆さまの研究の一層の深化と学会の発展をお祈りしてご挨拶を終わります。

(とやま みどり・学習院大学)

外山みどり



第 22 回(2020 年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

第 22 回にあたる 2020 年度日本社会心理学会賞が選考され、第 61 回大会総会にて発表、総会後に授賞式が行われました。各賞をご紹介しますとともに受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、本当におめでとうございます。

優秀論文賞

山本 翔子・結城 雅樹

「トロッコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究」(第 35 巻 2 号)

道徳的ジレンマ課題として有名なトロッコ問題において、日本人はアメリカ人と同様の倫理判断をするものの、行動意図は日本人がアメリカ人よりも低いのはなぜか。本研究は社会生態学的な視点から、関係流動性によって人々の行動意図が異なるという仮説を検証している。日本人の方がアメリカ人よりも関係流動性を低く知覚しており、関係流動性の低さが作為の行動に対するポジティブ評判期待の低さを予測し、これらが行動意図の文化差を媒介することを示した。社会的にも国際的にも重要な道徳的ジレンマの問題に対して、文化差が生じる理由を説得力の高いデータをもって明らかにした点が、理論的発展をもたらしたものとして高く評価された。また、態度と行動の乖離という社会心理学の古典的なテーマに対して、新しい知見をもたらしたという点でも影響力をもつことが期待される論文である。

奨励論文賞

林 幸史

「観光写真調査法による観光地の魅力評価」(第 35 巻 2 号)

本論文は、観光写真調査法(TPM)を用いて、奈良において観光客が魅力を感じる観光資源は旅行者の出身国や、訪問経験の多寡と関連があることを明らかにした。また、奈良の旅行者の観光経験は、文化見聞と自己拡大、健康回復と自然体感、消費行動と同行者との経験共有という 3 種類に大別された。本研究の独創的な点は、観光地での旅行において観光客が何を魅力に感じるかを測定するために、調査対象者である観光客が自由に撮影した写真から旅行を表現するための写真を選んで分類する TPM という調査手法を用いたところにある。分類結果に対して対応分析と階層的クラスター分析を適用するという工夫も評価された。TPM を観光資源以外の対象への評価へと応用することの可能性が期待される。

出版賞

松井 豊

『惨事ストレスとは何か——救援者の心を守るために』河出書房新社

「大規模な災害・事故・事件から受ける心の傷」といえば、誰もがまず被災者や被害者たちが受けるそれを想像するだろう。しかし本書が扱うのは、救援に駆けつけた消防や警察などのプロフェッショナルたち、偶然その場に居合わせた人たち、さらには報道や SNS などを通じてその場面を偶然見かけてしまった市井の人々が受ける心の傷、すなわち「惨事ストレス」である。本書は、この現象がどのような場面でどのような立場の人々の間で起こり、症状はどのような経過をたどるのか、また、症状を深刻化させる、もしくは軽減する要因、さらには個人や組織による(事前及び事後の)対処、などを分析・提案している。本書には、いくつかの重要な価値がある。第一は、ともすると気づかれにくい救援者側のストレスに焦点を当て、それを丁寧に記述して世の中にその存在を知らしめた点にある。今後も様々な災害や事故が起こっていく中で、本書はこれまで気づかれにくかった多様な被災の様相を示すものであり、さらにはそれに対してどのように対応すべきかの指針的な価値をも持つものである。

第二は、問題解決のために積極的に仮説発見的手法を用いている点である。著者は、現場に足を運んで人々の話に耳を傾け、行政と協働し、データを分析したうえで考察し、様々な仮説を生み出している。月並みな表現ではあるが、現場での問題解決にとってまず重要なのは、現場に根差した仮説なのだとは本書からは実感させられる。本書で見いだされた諸問題や仮説が、将来、より洗練されたデザインを用いて実証され、より明白な理論へと昇華していくことが期待される。

第三は、平易な語り口とふんだんに盛り込まれた事例を通じて、得られた知見や問題解決のヒントを専門家だけではなく実務担当者や一般市民にもわかりやすく伝えたいという著者の熱い想いが随所に満ち溢れている点である。ところどころに心理学用語の基礎的な説明が含まれているのも、広く知見を伝えるための工夫として価値があるものであり、さらに様々な現場の人によるコラムは、本研究の知見が新たに別の知見と組み合わせることができる可能性を示している。

本書は、社会心理学の書籍、特に本学会出版賞の受賞作としてはいささか異色かもしれない。例えば、収録されたデータの解析手法など、より洗練された適切な手法が別にあるかもしれない。また、先行研究のレビューや、知見の整合性などに関して、さらなる検討が必要な部分も見受けられる。しかしながら、未知の心の問題に対して、現場を這いつくばり、さらにそこで明らかになったことをたとえ粗削りであったとしても世の中に発信した本書の姿勢は、すべての社会心理学者にとって非常に重要なことを教えてくれている。この点こそ、本書が本学会出版賞を受賞すべきであるとする最大の理由である。

以上の観点から、本書を日本社会心理学会出版賞にふさわしい内容であると評価し、推薦するものである。

選考委員会

編集担当常任理事 1名	村本由紀子(東京大学)
常任理事以外の理事 6名	出版賞 樋口匡貴(上智大学) 結城雅樹(北海道大学)
	論文賞 内田由紀子(京都大学) 新谷優(法政大学) 松井豊(筑波大学) 渡邊芳之(帯広畜産大学)
理事以外の会員 4名	出版賞 池上知子(大阪市立大学:受賞者) 村井潤一郎(文京学院大学)
(編集委員/受賞者)	論文賞 縄田健悟(福岡大学:受賞者) 森尾博昭(関西大学)

受賞コメント

受賞の喜び

林 幸史

奨励論文賞を受賞できたこと、大変嬉しく思います。学会前夜に受賞の一報を頂いた時は、「まさか私が!？」という思いでした。あれから一ヶ月以上たった今では、人生の数少ない輝かしい記録として位置づけることができるようになりました。鳴かず飛ばずの売れない芸人さんがコンテストで賞をもらう時はこのような気持ちなんだろうなと想像がつかます。観光者を対象とした研究も、写真を使った調査手法も15年以上も前の院生時代から試行錯誤を繰り返しながら取り組んできました。研究業績も多くなく、これまで学会賞などとは縁遠い存在であった私がこのような賞を頂くことができたのは、細々とではありますが、他の方々がしないことを続けてきたのが良かったのかなとも思います。

本論文は、旅行者が観光地で自由に撮影した写真から、旅行者にとっての魅力の対象である観光資源や観光経験を明らかにしようとするものです。これまで、観光地や観光資源の魅力を評価する研究では、訪問者や専門家の理性的で合理的な判断をもとに魅力の評価が行われてきました。本論文では、カメラのシャッターボタンが押されるのが、撮影者の感性が刺激された瞬間であることに着目しました。魅力調査に写真を取り入れることで、感性や直観に基づく判断を取り込むことが出来ました。「観光写真調査法」と銘打ってはいますが、写真投影法や Visitor Employed Photography といった写真を使った従来の調査手法がその礎となっています。調査は今から5年前の2015年に実施したものです。10月から11月の週末に10日間、JR奈良駅前の観光案内所周辺でゼミの学生2名と私とで道行く旅行者に声を掛け、調査協力の依頼を行いました。調査初日は、声を掛ける相手を必要以上に厳選してしまった上に、不慣れな説明もあって、1人の旅行者からも調査協力を得られないという結果に落ち込んだことなどが思い出されます。その反省を生かし、調査の依頼方法にも工夫をし、最終的には20の国と地域の方々75名から協力を得ることができました。論文では書けない裏話としましては、たとえ外国語が拙い調査者であっても、写真調査であれば、多国籍の方々を対象とした調査が可能であるということです。私を含め、調査員として参加してくれた学生は、英語が流暢に話せるわけではありませんでした。調査では、旅行者が撮影した写真を見せてもらい、何を撮影したのかを聴き取ることを行ったのですが、写真というビジュアル表現があるために、言葉の壁に悩まされることは少なかったと記憶しています。

今のところ、写真を分析するための確立された手法というのはありません。得られた写真をいかに分析するのかが、15年前から抱え続ける課題でもあります。ただし、それは、写真がもっている情報量や意味が豊かであることの裏返しであるとも言えます。一枚の写真からは、撮影者が目の前の環境の中から、何に着目したのかはもちろん、その対象との距離感なども覗えます。さらには、その瞬間を切り取った撮影者の無自覚的で直感的な判断や、言語化し得ない思いなども詰まっています。ここに掲載されている私の顔写真は、今回のために小学生の長男に庭で撮影してもらったものです。私のことをご存じない方が、私の写真を見てどのような印象を抱かれるのかは分かりませんが、「いい笑顔だね」と思って下さるの



なら、それは長男の私に対する気持ちと、息子を眼差す父の気持ちの表れに他なりません。そんなことから、やはり写真は社会心理学でもっと取り扱われてもいいのになあと思ったりしています。

最後になりましたが、拙論文を審査頂き貴重なコメントを下された先生方、また本論文を奨励論文賞に選考下さった先生方に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(はやし よしふみ・大阪国際大学)

「授賞？嘘でしょ。」

松井豊

このたび、拙著『惨事ストレスとは何かー救援者の心を守るために』(河出書房新社刊)に、出版賞をいただきました。審査に関わった先生方に、幾重にも、お礼を申し上げます。

受賞した書籍の内容

本書は、災害や事故などの惨事に遭った後に生じるストレス(惨事ストレス)について、その症状、ケアの仕方、対策などを紹介した本です。惨事ストレス研究や、消防職員や看護職員や公務員やジャーナリストへの危機介入の経験をベースにして、執筆しました。惨事ストレスは通常、消防職員や自衛隊員などの災害救援者が被るストレスに限定して捉えられています。しかし、私はこれを広義に捉え、他の職種にも生じると理解しています。この理解に基づいて、本書では消防職員、看護職員、一般公務員などの惨事ストレスについて説明しています。また、ともに惨事ストレスにかかわってきた知己や友人に、コラムで他職種(バースタンダー、保育者、自衛隊委員、警察官、ジャーナリスト)の惨事ストレスなどについても、紹介していただいています。

「嘘でしょ」

受賞の知らせを聞いたのは、移動中の電話でした。この知らせを受けたときの率直な気持ちは、「嘘でしょ」でした。

本書が扱っている現象は、社会心理学に含まれるかどうか、微妙だからです。惨事ストレスは、臨床心理的な要素が強い領域です。私が審査者であれば(昔は出版賞の前身の「島田賞」の選考委員でした)、「これは社会心理学の本ではない」と、審査対象から外したと思います。

半信半疑のまま、後日、授賞理由をいただきました。同書の出版担当者山崎美奈子氏にも転送しました。理由を読んで、二人とも涙ぐみました。私どもの出版意図を深くくんでいただき、本来対象外であったはずの本書に賞を与えてくださったことに、感激致しました(私の涙は高齢による感情失禁だったかもしれませんが)。

黒子の仕事

授賞理由にもあるように、惨事ストレスは社会に広く認知されている概念ではありません。その危機介入やケアも、社会的にあまり知られていません。惨事ストレスの被害者にとっては、危機介入やケアを受けたことが周囲の人に知られると、スティグマになる可能性があります。そのため、惨事ストレスの危機介入は、関係者以外には広報せずに現地に入り、活動後も守秘義務に基づき、結果を発表することはありません。いわば黒子の仕事です。災害救援の主役は(惨事ストレスを被りうる)救援者であり、危機介入を行う者は脇役です。

今回の授賞はそうした黒子や脇役の仕事に光を当ててくださった。そのことにも感激しました。審査してくださった先生方や承認してくださった方々に重ねてお礼申し上げます。

コロナ禍の今も

現在コロナ禍において活動を続けているエッセンシャル・ワーカーや医療関係者や救急活動に携わる消防職員の方たちも、惨事ストレスを被る危険性があります(コロナ禍において救急活動を行っている消防職員の不安にかんしては、共同研究で調査を行い(研究代表者:畑中美穂氏)、プレスリリースしました。速報は「名城大学、コロナ、救急」で検索できます)。そうした人々を支えている方々に、この本は少しでも参考になるかもしれません。どこかで手に取っていただければと願っております。

本書の末尾にも書きましたが、いま心がけている言葉を掲げます。

“I wish to leave this world better than I was born”

by John F.W.Hershell、内村鑑三、青山士

惨事ストレスにかかわる多くの人々の世界が、少しでもよくなっていますように。

(まつい ゆたか・筑波大学)

※優秀論文賞を受賞した山本翔子先生、結城雅樹先生のコメントは、都合により次号に掲載いたします。あしからずご了承ください。



日本社会心理学会第 61 回大会開催報告

日本社会心理学会第 61 回大会が 2020 年 11 月 7 日(土)・8 日(日)に開催されました。初のオンライン開催は盛会のうちに無事終了いたしました。概要報告とともに、参加した会員からの参加記を掲載します。また、記録として第 61 回大会の質疑応答に関するデータを掲載します。

概要報告

期日：2020 年 11 月 7 日(土)・8 日(日) ※当日発表資料公開・質疑応答期間：11 月 6 日(金)～13 日(金)

会場：学習院大学目白キャンパス

大会準備委員長：外山みどり

1. 参加者数 390 名(予約参加のみ)
2. 発表件数 大会準備委員会シンポジウム 1 件 自主企画ワークショップ 2 件 発表 230 件
3. 発表取り消し 1 件

初のオンライン大会を終えて

石黒 格

正直に言えばオンライン上での大会というもののイメージがつかめずにいたのですが、実際に参加してみれば、非常に楽しい時間を過ごすことができました。通常の大会より堪能したかもしれません。この成功の一因は、我々研究者が慣れ親しんでいる、テキストを用いたコミュニケーションによる議論というスタイル(「掲示板式」と呼びます)の選択にあったと、個人的には思います。

対面では会えないという制約下でオンラインに大会を移植するなら、オンライン会議という方法がもっとも直接的になります。掲示板式では、通常の大会とはまったく異なるプロセスで発表と議論がなされます。発表を見に行けば口頭の補足なしで資料の読み取りを要求されますし、直接の言語的対話という学会の醍醐味が失われます。

こうした変化と、そこから生じる違和は容易に予測できるにもかかわらず、それでもなお掲示板式が選択されたことは、参加してみれば英断だったと感じます。実のところ、古くさく見える掲示板式こそ、ICT による相互作用の利点を活かしているからです。その利点とは、時空間の制約とコミュニケーションの同期性からの解放。その利点は様々です。自分が活用したのは、データを求められたときに、手で分析して追加提示すること、じっくり考えて、ときには何日か経ってから思いついたアイデアを返信できること、すべての議論をフォローできること、などなど。けれど、もっともうれしかったのはそこではありません。

大会参加に当たって、私は個人的な目標をひとつ立てていました。それは、「全セッション縦断」。すべての発表は無理でも、すべてのセッションのはぞく。できればコメントする。これは、時空間とコミュニケーションの同期性に縛られている通常の大会では不可能な目標です。この目標が立てられるのは、誰しもが毎回のようには味わっている「裏番組の苦しみ哀しみ」が、今大会では掲示板式によって解消されていたから。ただオンライン会議に移植しても、この問題は解決できなかったでしょう。

大会を企画するにあたって、covid-19 の影響を最小化することだけを考えていたら、オンライン会議への移植が提案されたはずですが、しかし、本大会を企画した方々は、オンライン上でのコミュニケーションの利点を最大限に活用するためには、どのような方法があるかを考えた。その結果、対面できないという問題を解決するだけでなく、通常の大会で生じている問題を同時に解消するアイデアに辿り着かれたわけです。大きな決断をしていたのだと思っています。

実際に全セッション縦断をこなすのは、それはそれは大変なことでした。金曜の午後から始めて3日間、1日4～6時間資料の読み取りとコメントを続けた結果、最後のほうは頭が回っていなかったように思います(申し訳ない)。しかも、コメントをすれば返信が来るので、かけ算で負担が増えていく。通常の大会ならセッションごとにリセットすればよかったのが、次々と頭を切り替え続けなければならないことも負担を大きくしました。その上、議論が平日にも浸透してきたことで校務も授業もボカだらけになるという危険も。二週間は疲れが残りました。10 年後に、まだこれをやる体力が残っているかという自信はありません。

それでも、参加を終えた今、今後の大会でも今回のシステムを併用してほしいと強く願っています。そのくらいこのシステムは楽しいし、参加の幅を広げるものだ確信したからです。通常の大会でも、物理的に参加はできず、オンラインでもいいから議論がしたいというケースは多々あると思われます。オンライン併用で大会参加者が激減するようなことはないはずです。対面の優位ももちろん大きい。特定の人とじっくり話すのも大会の醍醐味ですし、テキストだと冷静になってしまって妄想力が失われますし。そもそもコミュニケーションの密度が違う。

今後も掲示板方式が併用されることを期待して、楽しみつつも感じた課題を挙げて、稿をしめたいと思います。各発表についてのコメント数を表示する機能は、幅広い発表に視野を向けてもらうという意味ではネガティブな効果があったように思います。すでに署名があるところに署名がつくという社会心理学の古典的な実験が、自分の頭の中で再現されているのを発見するのは楽しい経験でしたが、発表の場としては望ましくありません。研究領域の価値は、流行で決まるものではないはずですので。むしろ、大学院生を始めとする若手の発表に対しては、コメンテーターを割り当てると、過去の大会でもあった取り組みをしてもいいかもしれません。時空間的に自由であれば、あのときの取り組みがさらに拡大できるのではないのでしょうか。

(いしぐろ いたる・立教大)

学)

第 61 回日本社会心理学会大会 参加記

水野景子

この度は大会参加記の執筆の機会をいただき、ありがとうございます。「初のオンライン大会の参加記は歴史的資料になりうる」と仰ってくださったこともあり、少し緊張しております。

第 61 回大会は、COVID-19 感染拡大防止のため、大会初の web 開催となりました。大会は、ワークショップ、シンポジウム、総会・表彰式は Zoom によるリアルタイム配信で、研究発表は口頭発表とポスター発表の区別なく 30 枚までの資料をアップする形で行われました。資料は 7 日間公開され、その間 web 上のシステムを用いた質疑応答が行われました。

私は今回の大会が三回目の大会参加となりました。今回の大会では、責任発表者としての研究発表と、発表資料の閲覧およびコメント、Zoom でのリアルタイムプログラムへの参加をしました。今大会では、web 開催ならではの参加の仕方、具体的には目の前の資料を自分のペースで読み込み、深く理解する参加ができたのではないかと考えています。

研究発表では、スライド 30 枚の資料を作るにあたり、「手元のパソコンやタブレットで見てもらえるのなら多少字が小さくなくても詳しく載せよう」とかなり詳細に研究を報告しました。資料公開後は、初日から多くの先生方に「こんな分析をしてみてもどうか」「次はこんな実験を設計してみてもどうか」などのコメントをいただきました。質疑応答システムが公開されている期間内にご指摘いただいた追加分析をし、その結果を報告してさらに議論ができたことや、既にいただいていたご質問を受けた新しいコメントをいただけたことは、web 上の質疑応答システムだからできたことだと思います。

スライド 30 枚をフルに使って研究報告をしていたのは他の先生方も同様で、情報量が多く読みごたえのある資料が多かったです。私自身の研究テーマと関連する社会的ジレンマや社会的価値志向性 (SVO) に関するご発表は勿論、7 日の公開期間のあいだに内々での Zoom ミーティングやゼミで各々が興味を持った発表を勧め合うなどして最終的には 50 を超える資料を読み込むことができ、大変勉強になりました。特に、複雑な実験条件を設けられているご研究において、結果パートを見てから「この実験条件はどんなだっけ」と前のページに戻って実験条件や実験操作を確認できたり、時間をかけて図表を見られたりしたことがご発表の深い理解につながりました。また、発表に対する質疑応答も文章で見ることができたため、議論の流れをじっくり追うことができました。

今回の大会では、「コロナ禍は社会を変えるか？」シンポジウムに加え、COVID-19 に関するご報告が 20 報近くありました。シンポジウムに登壇された先生方も仰っていたように、人々のリスクの感じ方は客観的なものとは異なりますし、危険だと感じたからといってすぐに正しい行動をするわけではありません。また、パンデミック下における特定の人々への偏見や差別的態度が社会問題となっています。人の心の癖に合った感染防止策を考えるうえでもそのような問題を解決するうえでも社会心理学の知見に基づくアプローチが大変有用であることを、ご発表を拝見して再認識しました。

web 開催ならではのよいところが多くあった一方で、また対面での学会に参加してポスター会場での議論をしたり他大学の院生さんや先生方と食事に行ったりしたいという気持ちもあります。いつになるかはわかりませんが、一日も早い COVID-19 感染症の終息と、皆様のご健康をお祈りします。

最後になりましたが、前例のない方法での大会開催に尽力された大会準備委員会の先生方に心から御礼申し上げます。

(みずの けいこ・関西学院大学大学院)

第 61 回大会における質問数に関するデータ

広報委員会 津村健太

日本社会心理学会史上、初のオンライン開催での学会大会となった第 61 回大会。学会大会における研究交流の主戦場といえば、各発表における質疑応答であろう。本稿では、三浦麻子氏(大阪大学)が収集した記録をもとに、オンライン大会での質問数についての集計を行った。

Web 発表の質疑応答システムの公開期間は、11 月 6 日(金)から 13 日(金)の計 8 日間であった。6 日 15 時 17 分の質問を皮切りに、13 日 23 時 23 分に最後の質問が投稿されるまでの間に、計 257 の質問が寄せられた。公開期間中の 1 日あたりの質問数の推移は、図 1 の通りである。また、第 61 回大会では 229 件の Web 発表があ

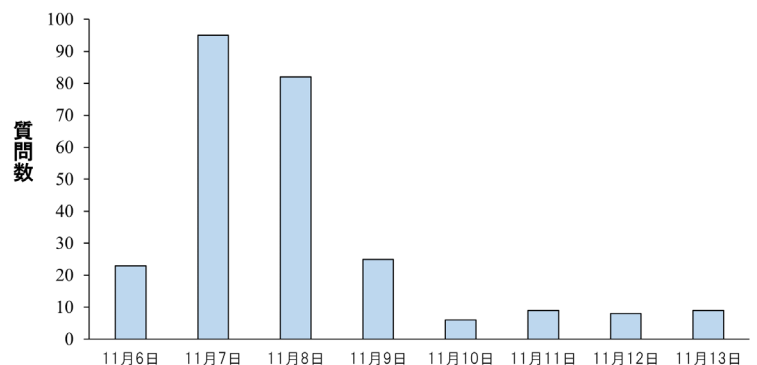


図 1 発表公開期間中1日あたりの質問数の推移

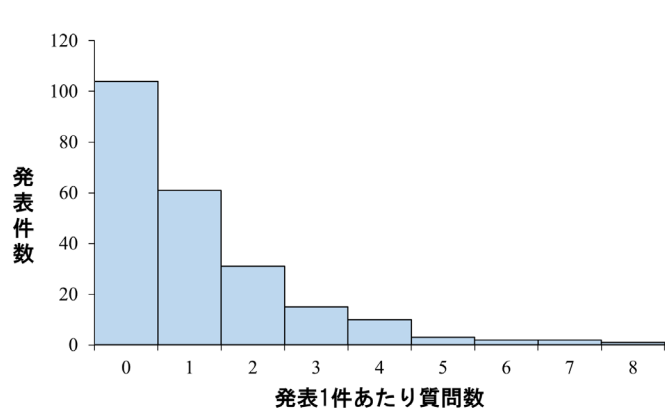


図2 発表1件あたりの質問数

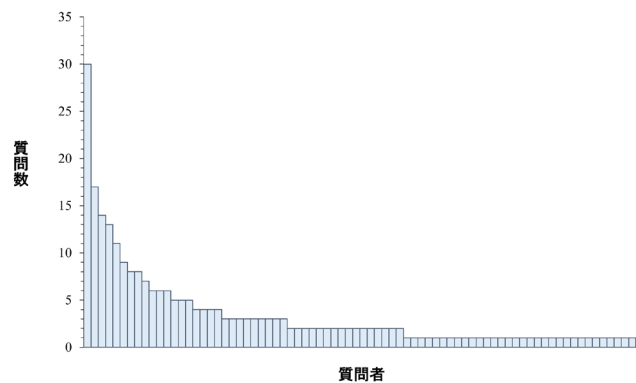


図3 質問者1名あたりの質問数

り、発表1件あたりの質問数は平均1.12、最大8であった。ただし、図2のようにパレート分布(べき分布)様となっており、中央値は1、最頻値は0であった。

質疑応答システムにて質問を投稿した参加者は、76名だった。質問者1人あたりの質問数をまとめたのが、図3である(質問数0の参加者を除く。以下、同様)。参加者1人あたり質問数の最大値は30だった。また、平均は3.38、中央値が2、最頻値が1となった。発表1件あたりの質問数と同様に、こちらもパレート分布様となった。質問を投稿した参加者のうち、自身が責任発表者である参加者は49名、そうではない参加者は27名で、前者の方が掲示板での議論に参加する動機づけが高いことを反映していると思われる。ただし、それぞれの群の質問数は平均3.45と3.26でほぼ変わらなかった。

コロナ禍の終息を願うばかりではあるが、もし今後、オンライン開催の必要性が再度生じた際に、本稿が参考となれば幸いである。

(つむら けんた・帝京大学)

オンライン大会裏話：国際文献社・黒木美日子さんインタビュー

第61回大会のオンライン開催にあたって、事務局業務を委託している国際文献社の方々に大変お世話になったことは言うまでもありません。そこで、2015年以来、大会ヘルプデスク担当としてご活躍下さっている黒木美日子(くろき みかこ)さんに今回の顛末について詳しく伺いました。(インタビュー・構成)広報委員会 三浦麻子

——本日はよろしくお願いします。まず黒木さんがどういう立場でオンライン開催に関わられたのかを教えてください。

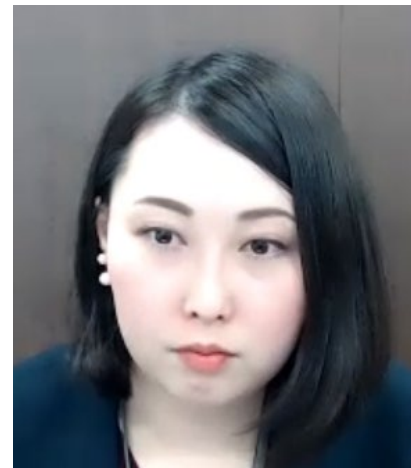
私は国際文献社の学術推進事業部門・学術講演会支援部(通称:大会部門)という部署に所属しております。主な業務は、学会が主催する年次大会などのイベントに関する事務全般やシステムのディレクションなどで、大会ヘルプデスクとして大会準備業務の一部をサポートしております。また、日本社会心理学会様の担当は、入社した2015年度からしております。

——今年度の大会の準備をそもそも始められたのは昨年のうちだと思いますので、その後にコロナ禍が発生したことになりますよね。

2019年12月に外山先生や大会準備委員会の先生方にご挨拶をしたのですが、当時はこのような状況ではなかったため、例年通りの内容で準備をしていました。年が明けて少し経った頃、新型コロナウイルスの話題が出始めました。当時は局所的なものだろうとのんきに構えていたのですが、あれよあれよと言ううちに3月の学会開催は全部中止になってしまいました。年次大会で一番多いのが9月開催で、その場合は4月頃から受付を開始することが多いんです。ちょうどそのタイミングで年次大会の開催についてご相談をいただくことが急増しました。先生方も私どもも、というより世界的に初めての事態ですから、参考にできる事例がないんですよ。

——「スペイン風邪の時の事例」なんて、ないですもんね。

天候不良などが原因で大会が中止された事例はあったのですが、今回のケースにお役に立つようなものではなかったんです。とにかくあの頃は色々と混乱していましたが、個人的には、語弊はあるかもしれないですが「これは面白いことになってきたな」と考えていまし



国際文献社 黒木美日子氏

た。このような混乱期はあらゆる物事が根本的に見直されます。学会のイベントもこれまでの開催形式を変更せざるを得ない状況になり、取捨選択を行う過程で「そもそも学会とは何か」という根本的な問いを改めて考えることになるだろうと予測しました。学会という組織が社会や会員に対して、何を提供することができるのか、また、提供していくべきなのか。これは、「日本中の学会を元気にする」というモットーを掲げている弊社にとっても重要な問いでした。この問いを通じて、私どもも原点に立ち返るいいチャンスになるんじゃないかと思いました。日々の仕事に集中しすぎてしまうと、どうしても「こなす」という感じになってしまうことがありますので。

弊社は印刷会社から始まって、お客さまのご要望にお応えするうちにさまざまな事業(学会事務局や編集事務局業務、学術講演会支援業務、ホームページ運営など)も行うことになったという経緯があります。そうやって始まっている会社ですので、弊社が提供するサービスや製品に合わせていただくのではなく、学会さまのご要望にできる限り沿った仕組みを共に作っていきけるのが弊社の強みなのだと考えました。あの頃は「不要不急」という言葉が世間で飛び交っていましたが、学会さまにとっての年次大会は「不要不急」とは思えず、オンライン開催という形であっても開催し続けるだろうと考えました。その中で弊社が提供できる役割の一つは、学会さまのご要望に添ったオンライン開催のプラットフォームを開発することだと考えました。

オンライン開催という形式になって新たに必要だったものは、会場が果たしていた機能、特に発表会場の代わりにする機能でした。その詳細を考える上で難しかったのが、弊社ではこれまで参加や発表の受付を中心に請け負っており、受付のお手伝いをするのは時々あったのですが、発表会場のお手伝いをした経験がなかったことです。とはいえ、発表会場を目にする機会がなかったわけではありませんので、それまでに見聞したことから、発表会場で必要な機能について社内で議論しました。大会発表は研究業績に直接つながりますので、やはり学会としてその機能をなくすことはできません。これまでの大会発表では、要旨の事前提出と、会期中に発表を行って質疑応答に参加したものを研究業績として認めていたわけですが。台風や地震が起きた際の緊急措置であれば、要旨を公開してこれで発表を認める、ということでもよいのかもしれませんが。それはこのコロナ下にはちょっと合わないと考えたんです。

——それらに比べたら時間はあるので、もうちょっと何かできることがありそうってことですね。

はい。私は入社する前、学生時代は千葉大学で知覚心理学を専攻していて、学部4年生だった2010年以来、いくつかの学会や研究会で発表する機会がありました。数えてみると、国外2回、国内7回。

——おお、結構参加されてますね。

そうなんです。初めて発表したときに、いろいろな先生が話し掛けてくださったり、賞を頂いたりして(注:日本視覚学会2010年冬季大会(工学院大学新宿キャンパス)ベストプレゼンテーション賞・黒木美日子・木村英司「水彩効果図形において輪郭の相対輝度が拡散色に及ぼす影響」)それが大きなきっかけの一つになって、年次大会という場が好きになりました。期間は短かったんですが、私には研究発表という場に参加した経験があるわけです。そんな立場から、もう一回あのとき見た会場の光景を思い出してみました。

まず思い出したのが、一つの質問が呼び水になって、質問がどんどん盛り上がる場面でした。その内容も、疑問に思ったことへの質問もあれば、似たような面白い研究があるから参考にしてみたら、というアドバイスもありました。他には、面白そうな研究を見つけると、「共同研究しませんか」とか、「うちの研究室に遊びに来ませんか」といった展開もあった、学生のその後のキャリアにつながったりすることもありますよね。質疑応答と聞いて単純に想像できるような場面だけではなく、もっと多くのコミュニケーションがなされる場だったことを思い出しました。だからこそ私は、オンライン開催になっても、コミュニケーションを取る場としての機能はなるべく落とさずにしていきたいと思いました。構想段階ではあれもやりたい、これもやりたいとは夢が広がる一方でしたが、夢を詰め込みすぎて、たとえばサーバートラブルを起こしてしまったら、ご迷惑どころの騒ぎではなくなってしまうわけです。このあたりの夢と現実のバランスを取りながら開発をしていきたいと考えました。

社会心理学会様の場合は、最終的にはZoomなどのオンライン会議システムではなく、発表資料の公開と掲示板形式での質疑応答を行うことになりました。ただここでも一つ大きな問題がありました。あらゆる学会さまがオンライン開催になったことで、需要がいつもの何倍にもなって、弊社の開発部門のリソースが逼迫してきてしまったんです。開発部門には過度な負担をかけないようにしつつ、一方で学会さまのご要望に添えるようなものを考えていく必要がありました。

私が先ほど申し上げたようなコミュニケーションに近い場として考えていたのが、Slackのようなスレッド形式で書き込める掲示板でした。社内からは開発リソースの問題もあり、「一問一答形式じゃ駄目なのか」みたいな声はあったのですが、それじゃ書き込んでいて楽しくないなって思っ

——それが8月、9月ぐらいなんですか、時期的には。

開発が始まったのは9月半ばでした。

——ぎりぎりですよ。

相当ぎりぎりでした。開催時期がより早い学会の優先順位が高くなりますので。そこで、8月に開催した学会さま用に開発した掲示板システムがあったので、それをたたき台にしてどう焼き直すかみたいのを考えていったんです。その学会様は Zoom での質疑応答が中心で、その補助ツールのな立ち位置で掲示板システムを提供しており、機能としてはごく簡単なものでした。そのシステムの機能向上に加えて、今回は質疑応答ボタンの近くにコメント数を出すようにしたんです。ポスター会場であれば、どこにどのくらい人が集まっているかを見ることができるので、私が参加者だったらオンライン開催でもコメントの件数は見たいだろうと思いました。私も学生のときは、盛り上がっているポスターを見かけると「何々？面白いの？」って見に行っていましたから。

——うん。あれ、面白かったですよ。コメントがついていることが目で見て分かったと、誰がどんなやりとりしてるだろうと思って、見るじゃないですか。自分が質問しなかったとしても、やりとりを読むだけで面白いのもある。

はい、聞いているだけで面白いこともたくさんあるので、そういう機能は入れたかったんです。

開発にあたっては、弊社で今まで取り組んでいなかった技術もあって、いつもだとウェブデザイナー1人とシステム担当者1人で開発することが多いんですけど、今回は合わせて5人、いやそれ以上、いろんな人にいろんなところを手伝っていただいて開発しました。それぞれの得意分野や持っている技術は違うので、この人のこの技術をこの部分では借りるみたいなことをして。

——会期中にもいろいろとアップデートをしてくださったりして、だいぶすごく使い勝手が良くなったのを参加しながら実感できたので、それもすごく良かったです。最初はちょっと書き込みにくい感じだったんですよね。やりとりがせつかくスレッドになってるのに、最初はスレッドになってない形でしかやりとりができなかったじゃないですか。だからちょっとどうなのかなと思ってたら、すぐに対応してくださったので、それが良かったですね。

はい。その機能はリリース時点で入れたいと考えていたのですが、かなりぎりぎりのスケジュールだったので、間に合わないままリリースしていったんです。でも、土日の間にコメント数もスレッドもどんどんどんどん伸びていき、不便さが目立ってしまったので、これはもう足してしまおうと。運用中にシステムを更新するのは、やはり開発担当者はためらうんですね。開発担当者は不具合を出さないという大きな使命が課されていますので、どうしても安全かつ現実的な方向に進んで行きたがるんです。でも、ヘルプデスク担当というのは学会と開発担当者とのパイプ役でもあるので、国際文献社の人間なんですけど、先生方の味方になって、先生方の代わりに闘うこともあります。

——ああ、ありがとうございます。

安全なものだけを目指しても面白くないですしね。サーバーが止まるレベルの冒険はもちろん避けるべきですが、多少のリスクを許容できる範囲はあるだろうと思っていて、できればそのぎりぎりのところを攻めていきたいなと思っています。だから闘ったこともありました。私も夢を詰め込んで。

——フフフフフ。

社内でも「こんなに色々要らないんじゃない」って言われたこともあって、正直、ここまでやらなくてよかったのかなと弱気になることもありました。でも、質疑応答システムを使って盛り上がる様子を想像して、ああ、ここで頑張らなきゃな、私が諦めるわけにはいかないなと思い直しました。

——今回、作っていただいた、あるいはそれをブラッシュアップしたようなシステムが、これからも使えるような形になれば一番いいですね。

そうですね。コミュニケーションの面では通常開催のほうが優れているので、もとの開催方式に戻る可能性もありますが、仮にそうなったとしても、台風などの気象災害のリスクは常にあります。様々な理由で急遽中止になったとしても、今後も質疑応答システムをお使いいただくことはできるんじゃないでしょうか。

——そうですね。「掲示板でやります」っていうので、最初はどれぐらいのものかなと思ってたんですよ。それが、私にとっては、予想外なぐらい面白かったですね。たくさん質問した人から一つ二つの方までいらっしゃるんですけど、もっともっとみんな来ればいいのにと感じてました。

ああ、そうですか。良かったです。ありがとうございます。私も気が気じゃなくて、土日はずいぶん見ていたんですが、思った以上に皆さん書き込みをされていて、しかもなんだか楽しそうで。気がついたら泣いていました。

——感激して？

感激しました。

——質問があった、という通知がメールで来るじゃないですか。そうすると本当に単純にうれしいんですね。ああ質問来た…！っていうのが。大会だとポスター会場でも口頭発表でも、黒木さんも経験されたように、ああ、この先生が質問してくれたとか、こんなことを声掛けてくれる人がいたとかっていうのが、すごくうれしいじゃないですか。通知もそうだし、何個質疑があるかっていうのもそうだし、それがいろんな形ですごく再現できてる感じがして。しかも、テキストベースでミニマムに再現できるところがまたいいなと思いました。Zoom にするとか、SpatialChat みたいなアプリでビジュアルで見せるイベントもありましたけど、あ、それしなくても十分足りるなど。

そうですね。オンライン開催でも残ってほしかった様々な場面が、ほとんど網羅されていて。横入りも、皆さん本当にしてくださっていたりとかしましたよね。

——そうそう。ああいうシステムにすると、わざとそれをしてくれる人がいるんですね。すぐたくさんコメントして下さった石黒さん(注:石黒格氏・立教大学)とか、ああ、最初から順番に回ってるなっていうのが分かるんですよ。あと中西君(注:中西大輔氏・広島修道大学)も、「なるべく質問がまだない発表に質問するんだ」とか言っていたり。協力的な人が何人かいてくださったのも、良かったですね。あのシステムがそういう気にさせたんだと思うんです。彼らただのボランティアじゃないので、自分で書き込んで面白くなければ、やらないわけで。

本当にありがたかったです。皆さんにたくさん書き込んでいただいて、ああ、良かったなと思えました。

——本当にそうだと思います。だからこそ、開発された方には是非お話を聞きたいと思ったんです。私も大会を主催したことがありますから、国際文献社の方々がすごくちゃんとお仕事して下さってるのはよく知ってたんですけど、こういう異常事態と一緒にあって、それこそ闘ってくださったというか。

フフフフ。はい。

——そういうことは、私個人が知ってるだけでなく、みんな知ったほうがいいよと思ったんです。1ヶ月半という短い期間での開発だったと伺って、随分ご負担をおかけしたんだなと改めて実感しました。

こういう事態はみんなで乗り越えるしかないということで、先生方もかなり協力して下さいました。初めにも申し上げたとおり、学会さまのご要望にできる限り沿いながら、こういう大変なときだからこそできることはないかとみんなで考えて作ったものです。それを分かってくくださる方がいらっしゃって、ありがたかったです。

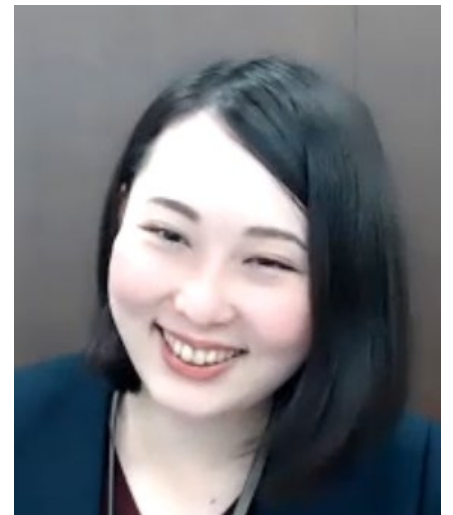
学会さまのサポートをするという仕事は、例えば美容師や、建築士と似た部分があるように思うんですね。お客様のほとんどはそれについて考える機会があまりなく、要望を言語化するのが難しいことがほとんどです。そういうお客様のござっくりした要望やイメージを伺って、具体的な形にする仕事であるという点が似ていると思っています。ご要望によっては、それはできません、みたいなことを言わざるを得ないようなものもあるわけです。様々な理由で現実的ではないとか、法律違反になるから駄目とか。それでもなんとか最適解を見つけていくような。

——そのたとえばとてもよくわかりました。「誰某みたいなスタイルにしてください」とか「全部窓の家にしたいです」とかは、いくらお金をもらっても無理なこともありますもんね。でも、ざっくりふんわりの要望やイメージになんとか近づけていくよう協力する。その意味で、黒木さんが心理系のご出身で、心理系の学会の雰囲気を知っておられたってのはすごく良かったんじゃないかなと思いました。

——最後に、印象に残ったことというか、この仕事をされたことが、黒木さんにとってどういう意味を持っていたか、持っていてほしいなと思ったんですけど、お聞かせいただけますか。

そうですね…。色々な意味でこれでよかったんだな、間違ってたかったんだな、って思いました。

乗り越えるべきハードルはいろいろあったとしても、私どもはやはり学会さまに喜んでいただくためにやっているんだなという初心を思い出しました。質疑応答システムの構想段階で、学生時代の資料をいろいろ引っ張り出したんですよ。で、今日のインタビューの機会もいただいたのでもう一回。当時やっていたことをいろいろ見返してみて、今の私がいるのはやっぱり学会での色々な出会いや教えがあったからこそだと振り返ることが



できました。そして学会に少しでも恩返しがしたいと思ったからこそ、今の私はここ(国際文献社)にいるんだということも改めて思い出しました。もちろんシステム開発は大変だったというのが本当のところですけど、それを乗り越えるパワーをくださっているのは学会や先生方なんだなって思いました。

——ああ、良かった。なんだか言わせたいみたいになっちゃいましたけど。ありがとうございます。

これからのモチベーションや活力にもなりました。ありがとうございました。

2020 年 12 月 4 日・Zoom により実施
(くろき みかこ・国際文献社 みうら あさこ・大阪大学)

会員異動(2020 年 9 月 25 日～2020 年 12 月 31 日)

入会

《正会員》

- ・一般 吉田真実(さいたま家庭裁判所少年調査官室調査官)
- ・大学院生 小野拳(鳴門教育大学大学院学校教育研究科)、谷口紀仁(名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻)、範紹群(明治学院大学心理学研究科)

《準会員》

岩谷綾子(株式会社ストーリーズ・オン/一般社団法人メディカルジャーナリズム勉強会取締役)、高橋茉優(東京大学文学部人文学科社会心理学専修課程)、森隆太郎(東京大学工学部システム創成学科)

退会

飯野麻里、松島保尚

自動退会

アイゼン・カリス、新井裕子、池間愛梨、石井祐貴、泉愛、市川孝一、犬飼佳吾、井堀宣子、今村夕貴、岩佐祥子、鶴子修司、エトウ・ジョナタン、王瑋、近江玲、岡田真波、長内優樹、落合春一、賈舒婷、片桐咲恵、木村拓真、栗原風音、児玉好信、後藤良子、佐々木智佳子、佐竹将希、佐藤広夢、佐山七生、蔣従楠、城間益里、新造一正、新谷茉奈、杉山成、曹陽、高野哲朗、瀧森渉、竹内晴佳、田村紋女、鉄川大健、冬賀純恵、遠山素乃子、富高智成、中村聖、新岡陽光、西村光一、浜村武、深瀬菜瑛子、古屋真、馬萌、前田和寛、松崎さくら、村田藍子、村中昌紀、八杉和人、山口司、兪善英、横山新一、李珊、李晶晶、李岩梅、柳学済、和田有史

所属変更

糟谷知香江(聖路加国際大学大学院看護学研究科)、角田勝也(バンブージャパン株式会社渉外部)、松本みゆき(愛知みずほ短期大学生活学科生活文化専攻助教)、柳澤邦昭(神戸大学人文学研究科講師)、服部陽介(京都先端科学大学人文学部)、高田治樹(医療創生大学教養学部地域教養学科専任講師)、大浦真一(東海学院大学/MEDI 心理カウンセリング/ピースマインド・イーブ(株))、後藤凜子(イグニション・ポイント株式会社)、片山拓海(海上自衛隊幹部候補生学校)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第 36 巻第 3 号

【原著論文】

酒井智弘・相川充 感謝表出スキルの実行がジレンマ状況にいる感謝される側に及ぼす効果

【資料論文】

石黒格 二要因モデルに基づく利益最大化傾向の日本語版尺度の作成

編集後記

日本社会心理学会第 61 回大会は、初のオンライン開催となりました。主催校である学習院大学の皆様、特に大会委員長である外山みどり先生におかれましては、開催にいたるまで様々な苦難があっただろうと拝察いたします。本当にありがとうございました。同時に、ビジネスとはいえ、突貫工事でご対応いただいた国際文献社の皆様にも頭が下がります。ありがとうございました。大会の開催は主催校を中心とした会員の尽力によるものですが、それだけではなく多くの外部の方々にも支えられています。今回とりあげた黒木さんのインタビューは、そのことを記録に残すために特別にお願いしたものです。多くの会員の皆様にお読みいただければ幸いです。
(藤島喜嗣・広報担当常任理事)